



「気」の受信機開発についての期待と展望 — 現代超心理学の観点から —

小久保 秀之¹⁾

1) 明治大学 意識情報学研究所

キーワード：超心理学、生体センサ、電磁センサ、乱数発生器、生成AI

【初めに】

将来、使いやすい「気」の受信機が開発できたら、人体科学や超心理学は飛躍的に発展するだろう。ここでは筆者の研究経験に基づいて、「気」受信機の開発の糸口が見つかるかもしれない3つの研究を論じる。

【生体センサの研究】

現時点で「気」などの未知作用に対して最も敏感なセンサは生体である。

■例 脳活動（上位の組織構造と情報処理機構）、予感実験（体の反応と脳における下位の情報処理機構）、地磁気に反応する松果体の神経細胞（細胞レベルの組織構造）、白血球の貪食活動（細胞レベル）、キュウリ切片の傷修復活動（細胞を構成する組織構造）。

ここで、白血球の貪食活動を活性化する作用が水溶液中に保持されていたこと、地磁気に反応する松果体の神経細胞が「気」を込めたメダルにも反応したことから、物質そのものに「気」などの効果を保持する未知の性質があることに留意したい。現時点では、それを検出できるのは生体センサだけである。

生体組織がどのように「気」を検出するのか、その仕組みを詳しく調べれば、「気」専用のセンサの開発が可能になるはずだ。細胞内の分子・組織で生じる量子もつれが関与する可能性があるため、使いやすいセンサを開発するには、

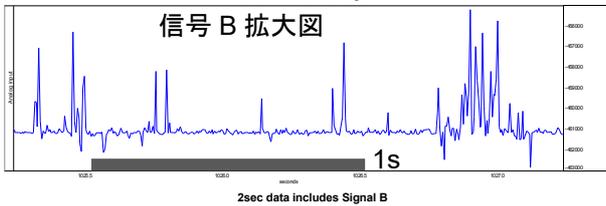
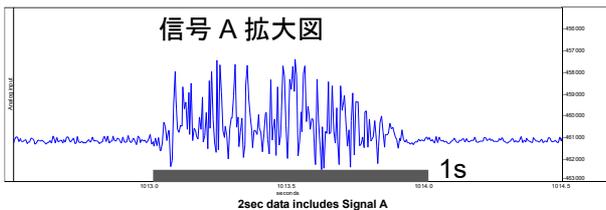
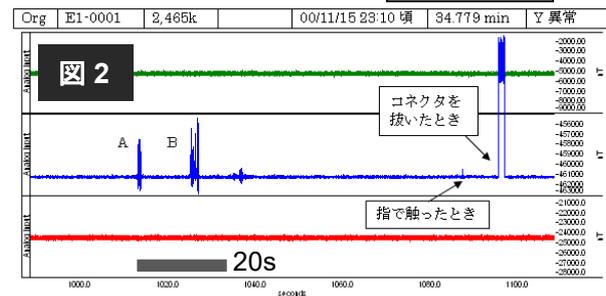
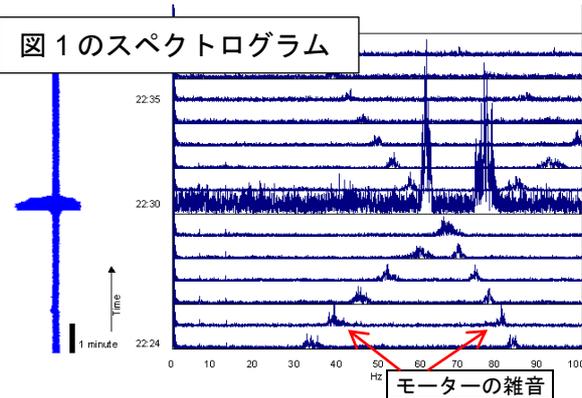
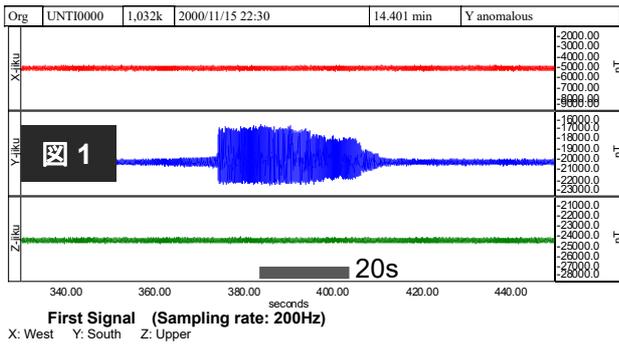
細胞内の量子もつれの詳細情報が必要である。使いやすいセンサの開発に至るまでには相当の時間がかかるだろうが、根気よく基礎研究を進めるべきである。

【電磁センサの研究】

主として可視光（電磁波）でサイを検出するのが念写である。優れた能力者でなければ念写光の検出が難しいとされているが、中国の雲南大学の研究者は透視能力を発揮するとき手に持った受光ダイオードにパルスが検出され、訓練段階の能力者でもパルスが検出できたと報告している。センサに使う受光ダイオードは、工場出荷時の検品をぎりぎり通過したか、何らかの事情で検品を通過してしまった規格外の受光ダイオードが適していた。物理化学センサを開発・製造している人は、ノイズが多くて開発を断念した失敗作や外れ値として除外した不良品の中に、「気」やサイの検出に適した物が隠れている可能性を考慮すべきである。

2000年に起こった岐阜県富加町のポルターガイストの測定で筆者は異常現象の記録に成功したが、そのときはアナログ回路の増幅率の異常増大（図1）と、あたかも呼びかけに応答したかのような変動が起こった（図2のA、B）。

ノイズに弱いアナログ回路は「気」やサイにも敏感と考えられるので、センサ開発ではアナログ回路の研究が重要である。



「気」やサイの発生に伴う電波を検出したという報告がある。日本ではスプーン曲げブームのときに念力能力者の頭部から20~40MHzの変調電波が検出され、優れた能力者は頭部から電波が出ることがわかった。また、90年代以降には、気の送受に伴う電波変化の報告もある。

電磁波は検討する周波数によって必要な装置が異なり、現在、テラヘルツ帯の発信・受信装置の開発とその応用が最重要課題として、世界各国で盛んに研究されている。将来、施術中のヒーラーの生体活動の変化がテラヘルツ帯の電磁波として施術対象者に感知され、それによって施術対象者の生体活動が変化する様子が捉えられるようになるかもしれない。

【乱数発生器 (RNG) をセンサとする研究】

9・11の同時多発テロ事件では、地球意識計画 (GCP) の世界各地の RNG の出力が同調的に異常変化したことが広く知られている。

現在の RNG はあまり検出力が大きいがないが、もし、RNG の電子回路に念力が直接作用するのなら、回路設計を変更すれば「気」やサイを一層効率的に検出できる可能性がある。

また、もし、サイが「純粋に確率的な現象の確率分布そのものを変える」という超越的な作用だとしたら、高次元情報空間の確率分布の変化を検出する手法を開発したり、RNGを積極的に組み込んだシステムを適切に構築すれば、現在の RNG よりも高感度の検出系が実現できる可能性がある。

霊界通信の研究者によっては、RNGを使って共時性 (シンクロニシティ) や「意味ありげな偶然の一致」 (meaningful coincidence) を強制発生させてカウンセリングの一助とすることがある。この試みは生成AIにも適用可能である。現在、研究開発と実用化が進んでいる大規模言語モデルAIでは、どのトークン (単語の要素) をつないで文を生成するかを確率的に選択する。この確率選択過程に超常的な作用が働けば、それは出力結果に反映されるだろう。現時点では本格的な実験的検証がむずかしいが、AI開発競争が一段落して設備と人材に余裕が出てくれば、挑戦する者が登場するだろう。

次世代の研究者が未知現象の新しい研究領域を開拓してくれることに期待する。